試行錯誤

別冊代わりに読む人

7

謎を謎のままに

試行錯誤7 目次

巻頭言　謎を謎のままに　友田とん　4

スズキナオ　谷崎潤一郎のことを考えながら散歩する　⑤　7

大阪の言葉と自分の距離

移り住んで年数が経っても、大阪弁が話せるようにはならないと感じている著者は、同じ移住者の谷崎がどのように言葉を身に付け、小説まで書いたのか気になって『細雪』を開いてみる。

伏見瞬　蓮實重彦論　⑦　22

蓮實重彦にとっての「物語」

蓮實は「物語」自体を批判しているわけではない。小津安二郎やジョン・フォードを論じた著書を読みながら、蓮實が「物語」をどのように機能させているかを明らかにする。

わかしょ文庫　大関の書いた小説を探して　④　33

「美人の薄命」を歯抜けで読む

当初は紳士・好男子と形容されていた実業家の俊男が悪人になっていた。失われた途中の号で一体何があったのか、想像をめぐらせる。

陳詩遠　なにがなんだか　⑥　45

海は転がる

物理学者の中でも、なんでも屋になることが定めの「実験屋」である著者は化学者の友人とともにレッドブル・ボックスカート・レースへの出場を目指す。さて結果はいかに!?

友田とん　短篇小説　読むと肩こりが治る小説のための　56

「読むと肩こりが治る」小説を目指す「私」に思いもよらぬオファーが舞い込む。あるはずのないことを考えることの先にあることとは。失敗が導く連作「読むと肩こりが治る小説」第一作。

巻頭言

謎を謎のままに　友田とん

長い小説の読みはじめはゆっくりで、しばしば行きつ戻りつする。たとえ急いでも、目で文字を追うばかりで中味は頭にうまく入ってこない。とりわけ初めて読む小説家の小説ならなおのことだ。それこそが新しい小説家に触れる醍醐味でもある。ところが、異物のようであったその文体やリズムやものごとの捉え方がやがて読んでいる私にも馴染んできて、徐々に普通の速度で読み進められるようになる。こんなに遅々とした歩みで本当に終いまでたどり着けるものだろうかと最初は心配したのが嘘のように、すいすいとまでは言わないまでも、ぐんぐんと読み進んでいく。読めば読んだ分だけ進む。

では、一度乗ってしまえば、順調に読み通せるかというとそうでもない。面白いと感じているのに、どうも中盤以降に私の読む速度はぐっと落ちてしまう。読み終わらないまま、本棚に戻してしまうことも多い。これはいったいどういうことなのだろうか。読み終えた小説で、とても好きな小説として印象に残っていても、肝心の話の展開や結末はほとんど憶えていなかったりする。それよりも細かな場面、空間、表情なんかがポッと思い出される。ドラマ的な展開を求めていないことがその一因であるかもしれない。

すこし前に「日常の謎」ミステリーというジャンルを知り、興味を持った。殺人など起きないが、どうしてそんなことがという日常の不思議な出来事が発生し、推理してその謎を解くものだ。私は日常の取るに足らないことに可笑しさを見つけて拾い集めてきたから、明らかに私の好みに合っており、どうしてこれまでそれを知らなかったのかと思った。それでいくつか「日常の謎」ミステリーの短篇を読んだ。それらはどれもよくできていて感心し、またとても面白かった。だが、私はここでも日常の謎が解かれる後半よりも、最初はただの偶然と通りすぎるような現象が度重なるうちに、またそれに直面した人の応じ方によって、日常の謎として際立たされ、浮かび上がってくる前半にこそ強い興味と面白さを感じた。なんならそこで本を閉じてもいいとさえ思ったのだった。

言い方を変えれば、日常の謎が謎のままにこの世界に存在していると感じられれば、もうそれで満足なのだ。そして、そのことは長い小説を中盤まで読み、その世界が立ち上がってしまえば満たされて、途中で読むのをやめてしまうこととも通じている。

謎は謎のままでも十分に意味がある。謎は解けなくてもいい。それは対象を探究することの放棄ではない。そもそも謎がすべて解けてしまうなどということは現実世界ではなかなかありえない。だから、ある部分では謎が謎のまま残っている。謎を謎のままにしておくことが、むしろ対象への興味というものを持続させもする。だとしたら、その姿勢こそが対象の探究のあるべき姿であると言えるのではないか。

『試行錯誤7』を編集しながら、「謎を謎のままに」という言葉が頭の片隅にあった。あえて謎を謎のままにすることで、対象の探究を進めていく。そんな側面をここに集めたエッセイ・批評・批評・小説に見出すことができるような気がしている。

谷崎潤一郎のことを考えながら散歩する

スズキナオ

第5回　大阪の言葉と自分の距離

東京で育ち、30代半ばに大阪に引っ越してきた。その大阪暮らしも気づけば11年目となって、よく考えるのだが、「ニューヨークに11年住んでいたんだよ」という友人がもしいたら、ニューヨークについてどんなことを聞いても答えてくれそうな気がする。もうベテランというか、ひとところに10年以上いたら、その土地のことにかなり通じているように感じられる。

しかし、大阪に11年いる私は、さすがに移り住んだ当初よりは大阪の雰囲気に慣れたと思うが、それでも、まだまだ初心者気分でいる。大阪について質問されても答えられないことばかりだ。

初めて会う人に私が東京から大阪へやってきた経緯を話すと、「大阪の言葉はうつらないんですか？」とよく尋ねられる。「いや、リスニングの方は問題ないと思うんですけど、喋る方は全然なんです」と、いつもだいたいそんな風に答えながら、実際どうなんだろうか、と思う。

自分が伝えたいことを大阪弁で話すというのはまるで無理なのだが、大阪出身の友達と会話していて、相づちとして「そうなんや」とか「そうやで」とか言ってしまったりする。そのたびに、少し恥ずかしい気持ちになるのだが、そんな風に口をついて

出てしまうということは、ほんの少しは〝うつっている〟とも言えるのかもしれない。

私の住んでいる場所の近くに「天満」と書いて「てんま」と読む地名があって、たくさんの飲み屋がひしめく繁華街なのでよく行く。その「てんま」のイントネーション一つとっても、引っ越してきた当初よりは、大阪の人の発音に近づいてきたような気がする（気を抜くとすぐもとのイントネーションに戻ってしまうのだが）。

でも、せいぜいそんなところで、私はちゃんと大阪弁を話すことができないし、自分の年齢を考えても、それはきっとこの先も変わらないだろうと思う。まあ、仕方ない。そう開き直っているつもりでも、たまに、自分が大阪弁を使えないことに向き合わねばならない時がある。

少し前のある日、大阪に越してきて以来ずっと付き合いのある友人とお酒を飲んでいた。その人は大阪育ちで大阪弁の話者なのだが、気質があまり大阪らしくないというか（それは本人が自覚していることらしく、「いかにも大阪っぽいノリには昔から馴染めなかった」と言っていた）、グイグイ来るとか、ものすごいスピードでのギャグのラリーを求められるとか、そういうことがないから私はいつも緊張せずに話すことができた。自分が東京の言葉でしか話せないことを意識しないで会話できるのだった。

蓮實重彦論

第7回　蓮實重彦にとっての「物語」

伏見 瞬

1．蓮實は「物語」を批判している？

蓮實重彦は、一見「物語」から遠い人物のように映ります。なにせ『物語批判序説』という書物のタイトルの本を出しているのだから、物語を批判してる人に違いない。ここ最近でも『物語化批判の哲学』や『ストーリーは世界を滅ぼす』といった本が出ており、「物語」を批判する言葉はたくさん出回っています。陰謀論や排外主義のような安易に見える物語が盛り上がっているといわれる中で、それに対抗する言説が必要だと考える人が一定数いる。そうした言説の先達として、蓮實重彦を置くことができそうです。

しかし、実際に『物語批判序説』を読んでみると、物語は駄目なんだ物語は危険なんだなんて話は一切出てきません。語られるのは、「終焉」の物語に対する批判的な言及です。人は性懲りもなく、「文学は終わった」だとか「近代は終わった」だとか、終わりについて語ってしまう。誰もが「終焉」の物語に安心しきって、刺激を欠いた言葉を重ねてしまう。その退屈さの正体を一つの主題として書かれたのが、『物語批判序説』という本です。

実際、この本が講談社文芸文庫に収録された際に「二〇一八年一〇月三一日」という日付と共に記されたあとがきで、蓮實重彦はこのように書いています。

では、『物語批判序説』は、いかにして書かれたのか。それが、いわゆる「研究書」であることから思いきり遠くあるために、註や出典の明記などをあえて省き、語り手のいうことをひとまずそっくり信じていただくほかはない「物語」として書かれたものであります。(p.292)

フローベールの『紋切型辞典』の話に始まり、プルースト、サルトル、バルトへと話が移り変わっていくこの書物を、蓮實重彦本人は「物語」と定義づけています。

著者本人の言葉を別に信じなくてもいいのですが、本書はたしかに「物語」として語られている。「知」や「終焉」をめぐる作家の書物や言葉が語り手によって紹介され、ひとつなぎの言葉の流れとして紡がれていく。語り手を持った散文の流れが形成される時、人はそこに「物語」を見てしまう。どんなに作者が拒否しても、「物語」はそこに発生してしまう。逃れられない条件です。

2. テマティスムと物語

蓮實重彦が物語的ではない批評家だと考えられる一つの理由に、彼が「テマティスム」を駆使して文章を紡いだ人物として知られていることがあるように思います。

映画や小説において、中心的に語られる物語の流れではなく、描写や映像の細部に注目すること。例えば、この小説家はよく「足」について書いているとか、この映画監督には「橋」がしょっちゅう映っているとか、一人の作家には特徴的な細部が存在する。その細部を文芸理論で「テーマ（主題）」と呼び、テーマに注目する理論を「テマティスム」と呼びます。

中心的に語られる物語ではない細部に言及するのだから、テマティスムは反物語的な理論だと考えられる。しかし、そうではない。細部に注目して論を進める行為は、物語を否定するのではなく、誰もが簡単に納得してしまう物語とは別の物語を語ることです。「物語じゃないもの」ではないのです。

もう少し具体的に見ます。蓮實の著書『監督 小津安二郎』の中で、小津の映画

大関の書いた小説を探して

（「大相撲観戦記」より改題）

わかしょ文庫

第4回

「美人の薄命」を歯抜けで読む

（前回までのあらすじ）

およそ１１０年前の大関、伊勢ノ濱が書いた小説を探していたわかしょ文庫。ついに国会図書館でその小説、「美人の薄命」が掲載されていた雑誌『國技』を発見する。一読してびっくり。華族の令嬢が破滅していくというストーリーで、相撲はまったく関係なかったのであった。

前回は「美人の薄命」の「第壹」「第二」を読んだ。主人公は由緒正しい華族の令嬢である初枝。子爵である初枝の父にスポンサーになってほしいと接近した実業家の俊男は、初枝の純真なさまに一目ぼれする。「第三」「第四」は国会図書館では欠号となっているため、今回は「第五」から読んでいきたい。

「第五」でまず印象的なのは、挿絵が入っているところである。見開きの二ページ目に主人公の初枝と、新キャラ「五郎」の半身、そして五郎の家の女中「お玉」と思われる後ろ姿が描かれている。初枝は鼻筋の通ったおちょぼ口。タッチは漫画的でかわいらしく、そこまで古めかしい感じはしない。今でも見るような画風だ。１１０年前であっても雑誌の挿画ってこんな感じだったんだな、というのにはちょっと驚いた。残念ながらどの回から挿画が入ったのかはわからず、描いた人物のクレジットも特にない。

初枝が五郎の住む小石川の家を訪ねるところから「第五」は始まる。先日、五郎が初枝の家を訪ねた際、初枝は富豪の俊男やその妹の芳子と大森の別邸で遊んでいて留守にしていたため、初枝はお詫びに来たという。五郎の素情についてはおそらくどこかで説明されたのだろうが推測すると、初枝の幼馴染あるいは従兄弟で、親の認める許嫁のような存在なのではないだろうか。初枝は控えめな性格だが五郎とは打ち解けた様子で話していることからも、この推測は当たらずも遠からずなのではないかと思う。初枝は五郎に留守を詫びに来たわりには、俊男や芳子と遊んだことを楽しそうに話す。五郎は、

五「さうかい、其（そ）れはよかつたね、それぢや初枝（はつえ）さんのお友達（ともだち）が一人（ひとり）ふえたと云（い）ふわけだね。」

なにがなんだか

陳詩遠

第6回　海は転がる

世の物理学者はおおまかに2種類いる――「理論屋」と「実験屋」である。理論屋は理論を作って現象を予言し、実験屋は実験をやってその現象を確かめる。物理学とは、この両輪をせわしなく回すことで発展してきた学問だ。

実験屋のやることは端的に言うなら、何か「世界一の測定」をすることにある。そう聞くといかにも最先端感があるが、使ってる多くの装置は自作である。素粒子の実験だと特に顕著であるが、目的がニッチすぎるため既製品がない（ダークマター検出器を作って売るメーカーがあったらこの世で一番かっこよいと思うが間違いなく破産するだろう）。かといっていちいち特注というのもコストがかかるので、自分でできそうなものは全部作るということである。金属やプラスチックを加工したり、電子回路を作ったり、高真空の容器や超冷たい冷蔵庫を設計したり、場合によっては小屋みたいな物体の建築もする。プログラミングはどんな実験でも必須である。物理のことを考えてる時間は意外と少なく、「なんでこんなことやってんだ」と思うことも多々あるが、なんでも屋になることは実験屋の定めであり、なんでもやることになるというのは醍醐味でもある。

この「自作すればＯＫ」の精神は日常生活においては結構役に立っていて、「ロ

ボットが段差を登るためのスロープ」みたいな、名前がついてなくて買い方がわからない細かいものを作って解決できるようになったり、「最悪改造すればよい」という気概から部屋を採寸しないで家具を勘で買うことができるようになる。また純粋に娯楽目的にものを作るという方向の発展もあり、２０２２年のレッドブル・ボックスカート・レースへの出走はその極致のようなイベントだった。

レッドブル・ボックスカート・レースとは、２０００年よりレッドブル社が世界各国で主催している自作カート選手権である。重力のみを動力としたカートで坂を滑走し、走行タイム・芸術点・出走前のパフォーマンスの3項目で順位を競う。陸上版鳥人間コンテストのようなイベントである。２０２２年の大阪大会は10年ぶりの日本での開催となり、日頃からレッドブルを愛飲している化学者の友人・湊拓生（みなとたくお）がその存在に気づいて参加することとなった。

書類選考ではインパクトを出さないといけないと思い込んだ我々は、何回か徹夜でエモーショナルな議論を交わした後、自転車の後輪を直径２ｍのクソデカい透明な球に置き換えた物体を作ることに決めた。さらに球の中に水とサーファーみたいなオブジェを入れることで、坂を転がすと中でサーファーが波に乗るという仕掛け

短篇小説

読むと肩こりが治る小説のための

友田とん

――メディアはマッサージである。
マーシャル・マクルーハンの校正刷りから

小説を書こうとする時、最初から失敗しようとして書きはじめることはない。何かのきっかけを掴み、今度こそはと思い、書きはじめる。だが、順調に思われた小説がどうもうまくいかない。こんなはずではなかったという思いが頭をよぎりながらも、最後まで書き切る。失敗作になっている。とはいえ、書きはじめた小説が一応の形になっている。それは何の失敗作なのか。ただ漠然とした小説の失敗に過ぎないのか？　ところが時間をおいてみると、それが「何のための」小説であったかわかることがある。失敗作を読み返すことを通じて、事後的にそれが何のための小説であろうとしたのかが、浮かび上がってくるのだ。何のための小説かがわかったなら、また一から書きなおせばいい。それはなんと幸運なことだろう。

十五年以上も前に、私は一つの小説を書いた。会社員の疲れた男が偶然知り合った整体師のもとで修業をするという原稿用紙二十枚ほどの短い小説だ。題名は「柔らかくなって」だった。「やわらかくなって」と漢字をひらいてあったかもしれない。むろん、これも失敗作である。ただこれほどあからさまな題材で、あからさまな題名を付けているのに、書いた時にはそれが「何のための」小説であるかは考えが及んでいなかった。何年も経ち、ビラ＝マタスの『パリに終わりはこない』と

いう小説の中で、主人公がかつて「読むと死んでしまう」小説なるものを書いたことを懐古するくだりを読んだ時、ようやく私は気づいたのである。かつて書いた小説は「読むと肩こりが治る」小説を目指していたのだと。ただ、その小説は語り手の「僕」が私自身に癒着してしまっていた。それだけが理由ではないが、それは少なくとも失敗作。以来、私は今度こそは「読むと肩こりが治る」小説をものにしたいと願いながら日々暮らしてきた。

「読むと肩こりが治る」小説などありえない。読んだだけで肩こりが治るなら世話ない。何を冗談を言っているんだ。そういう意見もあるだろう。私も半分は冗談なのだ。だけど、半分以上は本気だ。それに、ありえないものがあるとしたらどのような形を取るだろうかと考えることは、あるべくしてあるものについて考えるよりもずっと楽しい。現実では経験することのないことをたくさん考えることになるからだろう。元々長い間、私は小説を書きたいと願ってきた。だが、漠然と小説について考えることは自由であると同時に、取っ掛かりがなく、だから何も起きなかった。それよりも、「読むと肩こりが治る」小説がどうありえるのかを考える方が、特殊である分だけ具体的に考える取っ掛かりがあった。取っ掛かりから考えは

じめることで、次の考えることが勝手に浮かんできた。万が一そのような小説がありえないのだとしても。そうした運動はうれしい。

どうしてそういう方法にたどり着いたのだろうか。特殊な場合について考えてみる。いくつもに場合分けをして、それぞれ個別に考える。その方がやりやすいと考えるのは、私がかつて数学を研究していたからかもしれない。しばしば数学的思考が顔を出す。だから、小説のことを考えていても、方程式のことが頭をよぎる。

方程式に解が存在するかどうか。ただ一つの解が存在することを示す時、存在証明と一意性の証明をしばしば別々にやる。そして、ここが厳しいところだが、存在証明と言ったところで、単なる論理的なステップで証明できるわけではない。結局のところ存在することは具体的に解を一つ自分で作ってみせることでしか示すことができない。Do it yourself (DIY) だ。そこには論理だけではたどり着けない飛躍がある。それは、いくら小説について論じていても、結局小説を存在させようとすれば、実際に小説を書いてみせるしかないことと同じかもしれない。一方、仮に解を具体的に一つ作ってみせることができなかったとしても、何も手が出ないわけではない。もし解があるとしたら、少なくとも解はこういう形をしているはずだ、と

青木淳悟 9年ぶり小説集

憧れの世界
——翻案小説を書く

三島賞作家・青木淳悟はなぜ『耳をすませば』の翻案をくり返すのか？

舞台は１９９５年、主人公は受験を控えた中学三年生。読書に夢中の少女はくり返し図書館へと出かける。ついに書かれた青春小説。

ジブリアニメ『耳をすませば』に材をとるふたつの翻案小説「憧れの世界」、「私、高校には行かない。」を書き、書き換えつづけた著者。くり返される翻案を通じて、著者は何に直面し、何を考えていたのか。併録するエッセイではその創作の過程が明らかになる。

四六判並製本　２６８頁
定価　一三〇〇円＋税
ISBN 978-4-9910743-7-0
C0093　代わりに読む人刊

ネットストア
購入ページへ

可笑しさで世界をすこしだけ拡げる出版社

代わりに読む人の本

友田とん
先人は遅れてくる
パリのガイドブックで東京の町を闊歩する３
ISBN978-4-9910743-6-3
新書判並製本カラー　１４４頁
定価１７００円＋税

友田とん
パリのガイドブックで東京の町を闊歩する２ 読めないガイドブック
ISBN978-4-9910743-1-8
新書判並製本カラー　９４頁
定価１５００円＋税

わかしょ文庫
うろん紀行
ISBN978-4-9910743-3-2
四六判上製本　２０４頁
定価２２００円＋税

佐川恭一
アドルムコ会全史
ISBN978-4-9910743-4-9
四六判上製本　４４４頁
定価３１００円＋税

友田とん 編
代わりに読む人０ 創刊準備号
特集：準備
ISBN978-4-9910743-0-1
四六判変形並製本　２２２頁
定価１８００円＋税

友田とん 編
代わりに読む人１ 創刊号
特集：矛盾
ISBN978-4-9910743-5-6
四六判変形並製本　２２４頁
定価２０００円＋税

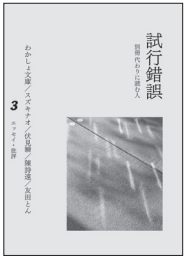
全国の書店でご注文いただけます。在庫状況により１週間～１０日ほどお時間をいただく場合があります。お近くに見当たらない場合は、代わりに読む人のネットストア（https://kawariniyomuhito.stores.jp/）もご利用ください。

試行錯誤 既刊

試行錯誤1・2・3

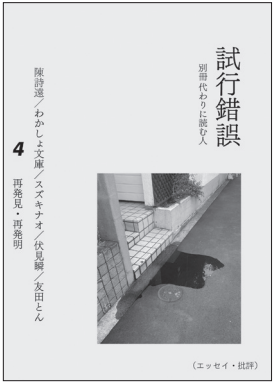
わかしょ文庫　大相撲観戦記
陳詩遠　なにがなんだか
伏見瞬　蓮實重彦論
友田とん　取るに足らないものを取る
スズキナオ　谷崎潤一郎のことを
　考えながら散歩する（試行錯誤3〜）

1号　2023年11月刊　文庫判56頁 九〇〇円＋税
2号　2024年3月刊　文庫判60頁 九〇〇円＋税
3号　2024年6月刊　文庫判86頁 一〇〇〇円＋税



試行錯誤4　2024年9月刊

陳詩遠　なにがなんだか
　祭典・採点
わかしょ文庫　大相撲観戦記
　大関の書いた小説を探して
スズキナオ　谷崎潤一郎のことを考えながら散歩する　暑い銀座のドイツビール
伏見瞬　蓮實重彦論　書籍版『蓮實重彦論』の構想をそろそろ本気で考えてみる
友田とん　取るに足らないものを取る
　ワークショップ



文庫判 76 頁 1,000 円＋税

試行錯誤5　2025年3月刊

スズキナオ　谷崎潤一郎のことを考えながら散歩する　吉野で一つ柚子をもらう
わかしょ文庫　大関の書いた小説を探して
　伊勢ノ濱復活なるか？
伏見瞬　蓮實重彦論
　蓮實重彦の「運動」をあらためて考える
友田とん　取るに足らないものを取る
　なんなら副産物狙いでも

文庫判 72 頁 1,000 円＋税

試行錯誤6　2025年6月刊

わかしょ文庫　大関の書いた小説を探して
　伊勢ノ濱復活なるか？
伏見瞬　蓮實重彦論
　蓮實重彦はずっと同じことをいっているわけじゃない。
スズキナオ　谷崎潤一郎のことを考えながら
　散歩する　芦屋の砂浜で猫を見た
陳詩遠　なにがなんだか　新米教員日記
友田とん　だいたいのアンザン（短篇小説）

文庫判 100 頁 1,000 円＋税

【編集後記】編集とはいいながら、ほとんど寄稿者のみなさんが送ってくださった原稿を組んで並べているだけですが、どの連載も回を重ねるうちに、立体的になり面白くなってきて、とてもうれしくなります。随分と前から書くと宣言していた拙稿「読むと肩こりが治る」小説はようやく一つ目が掲載できました。エッセイのような小説ですが、これを起点に連作を書いていきたいと思います。「数学小説」と合わせてご期待いただければうれしいです。どうぞよろしくお願いします。8号は二〇二六年三月刊行予定です。（と）

試行錯誤7

別冊代わりに読む人

２０２５年１１月３０日　初版第一刷発行（３５０部）

編集・発行人　友田とん

発行所　代わりに読む人

〒１５３－００６５

東京都目黒区中町２－６－９－３０２

https://www.kawariniyomuhito.com/

contact@kawariniyomuhito.com

印刷・製本　グラフィック

感想や見つけた「可笑しなこと」など気軽にお寄せください。